様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：１２２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０３１２２

研究課題名（和文）日本仏教の台湾布教における植民地主義の連続性と非連続性に関する史的研究

研究課題名（英文）Japanese Buddhist Missions to Taiwan: A Historical Study of the Continuity and Discontinuity of Colonialism

研究代表者
松金　公正（MATSUKANE, KIMIMASA）

宇都宮大学・国際学部・教授

研究者番号：５０３３４０７４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、植民地期の台湾において、日本仏教が、現地の文化や宗教と相互にどのような交渉をもちつつ布教活動を展開したのかについて、僧侶・信者の活動、及び現地の人々との交渉に関する史料を通じて史的研究を行った。
台湾に派遣された布教使に関連する史料が、各宗派・寺院・家族等によって、いかに保存・維持されてきたのか、また、中華民国統治下の台湾において日本仏教が残した施設や文物がいかに取り扱われてきたのか。以上の点に着目し、布教活動、布教使、布教施設等が、日台双方でどのような「記憶」として構築・継承されてきたのかについて植民地主義という視角から考察を加え明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
戦前数多くの僧侶が日本から植民地台湾に渡り、台湾の人々と接触、交渉を行った。しかしながら彼らの活動は公的記録には残されていない。個別の寺院や家族にその活動の記録が保存されているが、それらの重要性が了解されていることは少ない。他方、日本から台湾に持ち込まれた仏像や仏具に関し、台湾においてそれらは現存しているもののその由来や意味についてはほとんどがわからないままである。本研究はそれら史料を掘り起こし、その重要性を明らかにするとともに、それらモノ、史料をいかに保存していくかについていくつかの方法を提示したところに社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on Japanese Buddhist missionary activities in Taiwan during the colonial period and examines how they developed in negotiation with local cultures and religions. The analysis is mainly based on historical data on the activities of monks and their followers and their relationships with the Taiwanese.
How have the historical materials left behind by missionaries to Taiwan been preserved and maintained by various sects, temples and families? How were the facilities and artifacts left behind by Japanese Buddhists in Taiwan handled under ROC rule? Focusing on the above points, this study examines from the perspective of colonialism how missionary activities, missionaries, and missionary facilities were constructed and passed on as "memories" in Japan and Taiwan.

研究分野：東洋史

キーワード：台湾　仏教　布教　植民地　宗派

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

報告者は「日本・中国・台湾間の仏教における伝統の継承と近代的変容に関する史的研究」（平成 22 年～24 年科学研究費補助金基盤研究（C））によって、東アジアの近代化過程において、日本・中国・台湾に共通して存在する「仏教」という宗教が相互にどのような交渉をもち、いかなる影響を与えあったのかということについて、日本人仏教聖職者、及び仏教信者の各地域での活動と現地の人々との交渉に関する実証的分析を通じて、東アジアにおける「伝統的思潮」の継承と近代的変容との間の因果関係という視角から考察を加えた。

これらの調査・研究を経て、さらなる分析の精緻化において、以下の２点について継続して優先的に研究の基盤を整備する必要があることが明らかになった。

第一点目は、これまで部分的に収集してきた布教使の私文書を網羅的に収集・整理する必要があるという観点である。平成 24～26 年度に実施した試行調査により、台湾から日本に戻った布教使が自分の後継者や家族に残した史料が相当量残存していることが判明した。また、それらには、公文書のみでは考察しえない事象を明らかにするものが多く含まれる可能性が極めて高いことが推察された。さらに、これらの史料がどのように選別され、布教使逝去後、寺院・家族等にいかなる形で保存され、「記念」・「記憶」化されたのかという点を考察することによってこそ、日本仏教徒の植民地主義の一端を映し出すことができる。他方、史料の収集は、布教使の後継者や家族等の高齢化と世代交代に伴う散逸という面を考えると急務の課題である。

第二点目は、植民地時期に台湾に建設された寺院・布教所等が戦後いかに利用され、台湾における「日本」理解に対しどのような意義をもつものになったかという点を分析するために、戦後の寺院・布教所が中華民国（台湾当局）によってどのように取り扱われてきたのかという史料を収集するという観点である。

２．研究の目的

本研究の目的は、植民地期の台湾において日本仏教が、現地の文化や宗教と相互にどのような交渉をもちつつ布教活動を展開したのかについて、僧侶・信者の活動、及び現地の人々との交渉に関する史料分析を通じて実証的に明らかにすることにある。その上で、台湾派遣布教使関連史料が、各宗派・寺院・家族等によって、いかに保存・維持されてきたのか、また、台湾に残された関連施設が戦後台湾においていかに取り扱われてきたのか、といった点に着目し、かかる布教活動、布教使、布教施設等が、日台双方でどのような「記憶」として構築・継承されてきたのかについて植民地主義という視角から考察を加え、明らかにする。

３．研究の方法

本研究では、先行研究で欠落していた日台仏教の相互関係を、行政文書、私文書、及びフィールドワークにより、多面的かつ実証的に考察する。また、このような調査・研究を通じ、布教活動、布教使、布教施設等が、日台双方でどのような「記憶」として継承され、再構築されてきたのかについて、植民地主義という視座から捉えなおす。さらに、戦後の台湾において「日本」という概念がどのように利用・活用されてきたのかという点について検討を加える。

４．研究成果

研究期間を通じて、台湾、中国、日本において、史料収集、及び現地調査研究を実施した。

（１）平成 29 年度は本研究課題に関する初年度であったため、まず、近年の研究成果を整理するために参考資料を購入、収集し、先行研究の整理を行った。次いで、本邦、及び台湾における現地調査研究を進めるとともに、国内外の研究者と意見交換を行いつつ、本研究課題の問題設定、基本的な研究の方向性についての考え方の調整を図り、それに基づいて大まかな全体像の把握に努めた。主な調査内容は以下の通り。

国内における現地調査研究としては、まず平成 29 年 5 月 26 日から 28 日に京都において、浄土真宗本願寺派・大谷派等を中心に宗派機関誌史料の収集を実施した。次いで 12 月 23 日から 24 日、平成 30 年 2 月 11 日から 12 日に東北福祉大学、及び曹洞宗関連の寺院等において、布教使関連の資料収集を行った。特に植民地布教に重要な役割を果たした曹洞宗僧侶布教使佐久間尚孝に関する資料の一部を得ることができたことは、本研究の進展に大きな意義があった。

国外においては、平成 29 年 10 月 14 日から 18 日に台湾総督府の対仏教政策、中華民国の戦後台湾における仏教政策に関する史料について、台湾の中央研究院近代史研究所図書館、国立台湾図書館、国史館、国家図書館、国立台湾大学図書館等において収集した。また、平成 30 年 3 月 8 日から 13 日に布教使関連の資料を雲林県土庫鎮、虎尾鎮等で収集した。特に土庫鎮順天宮において得た真言宗布教使に関する史料は、当時の布教使と現地信徒の関係性について新たな知見を導き出す可能性をもつものといえ、本研究にとって重要な意味をもつ。さらに、日本仏教と中華民国仏教との間の関係性を研究している中央研究院近代史研究所訪問研究員のエリック・シッケタンツ氏等と意見交換を行った。植民地時期、及び中華民国仏教会関連の史料所蔵、公開に関する理解を深め、次年度以降の現地調査研究の精緻化に関し有益な議論ができた。

（２）平成 30 年度は本研究課題に関する第 2 年度であったため、前年度の調査研究を踏まえた上で、本邦及び台湾における現地調査研究を進めるとともに、国内外の研究協力者と意見交換を行いつつ、本研究課題の問題設定、今後の研究の方向性についての考え方の調整を図り、それに基づいてより精緻な全体像を描くことに努めた。主な調査内容は以下の通り。

国内における現地調査研究としては、昨年度の調査により東北地方の曹洞宗が台湾布教に深くかかわっていることが分かったため、まず、平成 30 年 7 月、9 月、11 月、平成 31 年 1 月、2 月に宮城、岩手、秋田の曹洞宗関連の寺院等において、布教使関連の資料収集を行った。また、7 月に金沢において、浄土宗忠魂堂等に関する史料を収集した。さらに 12 月には愛媛において、南瀛仏教会に関する資料収集を行った。特に植民地布教における学校教育、社会教育に重要な役割を果たした木村雄山、升田栄、佐久間尚孝等に関する資料の一部を得ることができたことは、本研究の進展に大きな意義があった。

国外においては、平成 31 年 3 月に台湾総督府の対仏教政策、中華民国の戦後台湾における仏教政策に関する史料について、台湾の国立台湾図書館等において収集した。また、布教使関連の資料を花連県吉安郷、雲林県土庫鎮、嘉義県渓口郷等で収集した。特に渓口郷北極殿において得ることのできた真言宗布教関連資料は、昨年度収集した資料と密接に関わり、新たな知見を導き出す可能性があり、本研究にとって重要な意味をもつものであった。

（３）令和元年度は本研究課題に関する最終年度であったため、平成 29、30 年度の調査研究を踏まえた上で、本邦及び台湾における現地調査研究を進めるとともに、研究の総括を行うために研究集会において成果の公表を行った。主な調査内容は以下の通り。

国内における現地調査研究としては、昨年度までの調査により東北地方の曹洞宗が台湾布教に深くかかわっていることが分かったため、平成 31 年 4 月、令和元年 5～7 月、10～12 月、令和 2 年 1 月、3 月に宮城、岩手、山形等の曹洞宗関連の寺院等において、布教使関連の資料収集を行った。また、11 月には高野山において本研究の調査によってその所在がはじめて明らかとなった真言宗が台湾に持ち込んだ仏像に関する調査・研究を行うとともに、大阪において曹洞宗布教使の家族への聞き取り調査を行った。木村雄山、升田栄、佐久間尚孝等に関する資料を継続して収集するとともに、佐藤全明に関する新資料を得ることができたことは、本研究の進展に大きな意義があった。一方、国外においては、令和元年 8 月に布教使関連の資料を基隆市、台北市等で収集した。特に基隆市で得た曹洞宗布教関連資料は、日本仏教が建設した寺院の戦後の変遷を考察する上で重要な史料であった。

（４）本研究の現地調査・研究によって、真言宗高野山から台湾にもたらされた仏像の存在を明らかにすることができた。また、曹洞宗台湾布教使の派遣と東北地方の学僧との間に一定の関係性があることも判明した。

（５）主な成果としては、平成 29 年 11 月 26 日に台湾の逢甲大學で開催された「2017 年佛學與人生國際學術研討會（シンポジウム）」において、「殖民地時期在台日本佛教推動的生命教育―以日本佛教在台灣展開的社會事業（1895～1937）為主―」という報告を行い、木村雄山と教育事業、佐久間尚孝、佐藤全明と社会事業との関係性について整理し、報告した。本論文は初めて日本仏教が台湾に展開した社会事業（含教育事業等）の全貌を呈示したものである。なお、同報告は翌年逢甲大学より出版された『2017 年佛學與人生國際學術研討會論文集』に査読を受けた上で掲載された。また、平成 30 年には『近代仏教』第 25 号に書評「中西直樹『植民地台湾と日本仏教』（三人社、平成 28 年）」が掲載され、当該書評において本研究の立場である内地人と本島人の交渉の中での布教を考察する必要性をまとめた。また、同年 8 月には柴田幹夫編『台湾の日本仏教―布教・交流・近代化』（勉性出版）に「『廟』の中に『寺』を、『寺』の中に『廟』を―『古義真言宗台湾開教計画案』の背景にあるもの―」を発表し、同年 9 月 14 日に天理大学中国文化研究会において「植民地期台湾における真言宗の布教方針の転換と在来寺廟」という報告を行った。さらに令和元年 11 月 30 日に新潟大学主催国際研究集会「台湾の日本仏教―布教・交流・近代化―」において「植民地期台湾における真言宗の布教方針の転換と在来寺廟」という研究報告を行い、同年 12 月 8 日に逢甲大學主催「2019 年佛學與人生國際學術研討會（シンポジウム）」において「殖民地時期台灣真言宗之傳教方針的轉變」という報告を行った。これら一連の報告を通じ、植民地期の台湾における日本仏教の布教活動は内地人を中心としたものと言われてきた。しかし、『布教計画』が作成される等、1940 年代には、本島人の信者獲得へと方針を転換した。そのような方針転換がなぜ可能だったのか、またそこで何が起きたのかについて検討してみると、そこで採られた方策は、「廟」の中に「寺」を注入し、「廟」の枠組みを利用して布教を拡大するというものであったことが明らかとなった。

今後の課題としては、上記から導きだされた分析に基づいてはじめて、戦後の台湾において「日本」という概念がどのように利用・活用されてきたのかを明らかにすることが可能となるのであり、また戦後の日本において「台湾」という概念がどのように利用・活用されたのかを明らかにすることにもつながる。そういった観点から今後も史料収集、調査を継続していくこととする。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 松金公正	４．巻 222
２．論文標題 「廟」の中に寺を、「寺」の中に「廟」を―『古義真言宗台湾開教計画案』の背景にあるもの―	５．発行年 2018年
３．雑誌名 アジア遊学（台湾の日本仏教―布教・交流・近代化―）	６．最初と最後の頁 19-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　3件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 松金公正
２．発表標題 植民地期台湾における真言宗の布教方針の転換と在来寺廟
３．学会等名 天理大学中国文化研究会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 松金公正
２．発表標題 殖民地時期在台日本佛教推動的生命教育 ―以日本佛教在台灣展開的社會事業（1895～1937）為主―
３．学会等名 2017年佛學與人生國際學術研討會（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 松金公正
２．発表標題 植民地期台湾における真言宗の布教方針の転換と在来寺廟―「廟」の中に「寺」を、「寺」の中に「廟」を―
３．学会等名 国際研究集会台湾の日本仏教―布教・交流・近代化―（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 松金公正
２．発表標題 殖民地時期台灣真言宗之傳教方針的轉變
３．学会等名 2019年佛學與人生國研討會
４．発表年 2019年

〔図書〕　計2件

１．著者名 逢甲大學人文社會學院	４．発行年 2018年
２．出版社 逢甲大學出版社	５．総ページ数 248
３．書名 2017年佛學與人生國際學術研討會論文集	

１．著者名 宇都宮大学国際学部編	４．発行年 2018年
２．出版社 下野新聞社	５．総ページ数 183
３．書名 多文化共生をどう捉えるか	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考